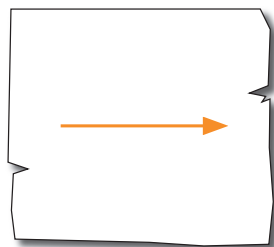


THE 7 FRAMES FOR LIFE

7つのワクワク枠 となりのコンパス③

第3フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

ライフは、
この上ない宝じゃ。

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



となりのコンパス③

『 → 』

プロローグ

49

ランプベリーは、いつしか昼寝^{ひるね}を始めていた。

「——で、おじいちゃんの将来^{しょうらい}は？」 僕は、軽い^{かる}気持ち^{きもち}で尋ねた。

「——。 ——わしやあ、死ぬ^しだけじゃな」

「——」 . . .

しばし沈黙^{ちんもく}が流れた——

かと思うと、おじいさんは再び^{ふたたび}口^{くち}を開いた。

「——というのは、冗談^{じょうだん}じゃ。

こう見えてもな、わしにも、たーんと将来^{しょうらい}の夢^{ゆめ}や目標^{もくひょう}がある。

内容^{ないよう}は、秘密^{ひみつ}じゃがの。アッハッハッ！」

「——」

「それに、わしには、すてきな思い出^{おもいで}たちもある。

それに、わしには、幸せ^{しあわせ}な今^{いま}もある——」 満足^{まんぞく}そうな笑^えみを浮かべているおじいさん。「みんな大好き^{だいすき}じゃ。みんな——」 おじいさんは、そのまま、座^{すわ}った姿勢^{しせい}で目^めを閉^とじた。

「スー —— スー —— スー —— …」 かすかに寝息をたてているおじいさん——。僕は、おじいさんが自然に目を覚ますまで、ぼんやりと水平線の彼方を眺めていることにした。

50

「——あ？ すまん、すまん。思わず、夢の中に入り込んでしまうたわい。やっぱり、もう年じやのう。アッハッハッ！」

「——。おじいちゃんの人生—— これからも、長いんだかんね？ これからも、ずっと—— ずっと——」

「——」 おじいさんは、何も言わずに再び目を閉じた——
かと思うと、口を開いた。「——サンキュー」

飛行機雲のラインが、大空高く描かれている様子が見える——。

「思ったんだけどさあ、7つのフレーム・フォー・ライフ——7つのワクワク枠って、結局は何のためになるの？

——ゴールは、いったい何？」率直に尋ねてみた。

「——。 ——ん？ 前に話さなかったっけ？」とおじいさん。

「え？ ——聞いたっけ？」

「アッハッハッ！ いずれにせよ、そいつは、いや、そいつも——おまえさんに任せるのが一番よいじゃろう」

「——。 ——どうして？」

「——。 はて、どうしてかな——」

4 となりのコンパス

「——」 . . .

「——うむ。では、そろそろ、第3フレームについて説明しようかの」

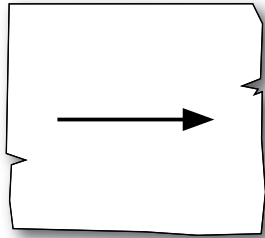
「ああ、ほい来た」 僕は、おじいさんに地図を手渡した。

音楽——テーマ曲イン

♪ 美しき自然 Beautiful Nature


タイトル流れて。

第3フレーム



51

「よーく見ておれよ。こうじゃ」 おじいさんは、まず、紙の上で
指を滑らせながら、左から右へとゆっくり移動させた。あたかも、
そのスピードにも意味があるかのように——。

すると、次に、その末端にVの字を90度回転 
させたものを付け加えた。思わず、空の飛行機雲をちらりと見た。

「へ？ 何だこりゃ？ これでおしまい？」

「そうじゃのお。ほかには——」 今度は、ぐるりと円を描いたり、
クルクルらせんを描いたり、波打つように描いたり、ジグザクに
描いたりして、それぞれの末端に“回転V”を付け加えた。



前に夢の中で見た空飛ぶコンパスの“メチャメチャな動き”を、
ふと思い出した。「おじいちゃん——、——なめんでない」

「なめておらん。大まじめじゃ。まあ、最初のまっすぐのやつは、
ほんの一例にすぎないということじゃな」

「それにしても、——いったい何だこりゃ？」

「第3のワクワク枠、第3の“フレーム・フォー・ライフ”じゃ。

少なくとも、いろーんな“ライフのあり方”があることを教えて
くれる」

「こんなの—— わかりっこないよ」

「そうか？ ——それでは、わしゃあ、これから昼寝タイムじゃ」

「あ？ さっき眠^{ねむ}っていたじゃん」

「アッハッハッ！ 昼寝^{ひるね}=睡眠^{イコールすいみん}だとは限^{かぎ}らんじゃろ？ さて、これから気^き合^あい入^いれて横^{よこ}になって昼寝^{ひるね}しようかの」 おじいさんは、そのまま本^{ほん}当^{とう}に横^{よこ}になった。「——昼寝^{ひるね}タイム、スタート。カーン♪」

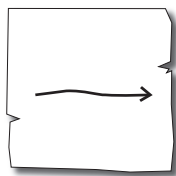
「どうしてゴングが鳴^なるんだよ。それに、そもそも、なぜ昼寝^{ひるね}なんて——。 ——時^じ間^{かん}がもったいないよ」

「まあ、生^いきているから—— そう答^{こた}えておこうかの」

そのとき、この第3フレームのすごさを、全^{ぜん}然^{ぜん}、想^{そう}像^{ぞう}できなかつた。

52

家^{いえ}に帰^{かえ}ると、さっそく鉛^{えん}筆^{びつ}で書^かき入^いれてみた。



ちょっと曲^{まが}っちまったけど—— ま、いっかあ。

おじいちゃん、あれこれゴチャゴチャと描^{えが}いていたしなあ。

「おーい、わかる？」 手^てに持^もつと、さっそくコンパ^{はな}ースに話^{はな}しかけてみた。

「ほいほーい♪ わかるのでございますう〜♪」 いつものあの声^{こえ}。

「よっ、久^{ひさ}しぶり。 ——それにしても、第^{だい}3フレームってさあ、

「^{まった}全く、ふざけているよね？」

「なぜ、そのように思^{おも}うのでございましょう〜？♪」

「なぜって、そうじゃん。メチャクチャ^{なん}何でもありのようだし——
「^{まった}全く意味不明だし—— ^{だれ}誰がどう見^みたって、そう思^{おも}うはずだよ」

「なるほどお〜♪ そのような理^り由^{ゆう}がございましてので、^{じやくかん}若干の、
ご立^{りつぷく}腹モードなのですねえ〜♪」

「——あれ？ やっぱり、どことなくキャラク^かターが^か変わっている
^き気がする——」

「ギャハハ！ きっと、アップグレードしたからなのでございます
よお〜♪」

53

第^{だい}3 フレームを利用^{りよう}したプチ・マッ^{づく}プ作りは、一筋^{ひとすじなわ}縄では行^いかな
かった。

その^ご後も、そのことを何^{なん}度も考^{かんが}えてみたものの、さ^いっぱり意^い味が
わ^わからないまま、時^すきが過^あぎるだけだった。

そして、夏^{なつ}が^おわりを告^つげ—— 秋^{あき}が^{ふか}まりつ^つつあ^あった、ある晴^は
れの日^ひの朝^{あさ}—— ラン^{らん}プベ^べリーが息^{いき}を引^ひき取^とったんだ。

音楽^{おんがく}イン ♪秋 Autumn

——シ^しョックだった。泣^ないた。へ^へこんだ。

日^に中^{ちゆう}に一^{いっ}家^かで一^{ひと}通^{とお}りのことを済^すませた。

その日の夕方——僕は、ベッドの上に横になり、天井を眺めながらランプベリーのことを振り返った。

ランプベリーは、祖母の家で生まれて間もない子犬の頃に、おじさんの車で運ばれて初めて家にやって来たんだっけ——。

初めて家にやって来たとき、ダンボール箱の中で“クンクン、クンクン…”と弱々しく鳴いていたランプベリー。

おそろおそろ初めて抱っこした僕の顔を、ペロペロしていたランプベリー。

投げたボールを、しっぽを振りながら追いかけたランプベリー。
初めて外の犬小屋で夜を明かす晩に、遅くまで付き添っていたときの不安げなランプベリー。

毎日のように海辺や川辺へと一緒に散歩していたランプベリー。

子犬を3匹産んだランプベリー。

おじいさんにじゃれつき、頭をペロペロなめていたランプベリー。

穴を掘り続けている僕を、のぞきこんでいたランプベリー。

イチゴを器用に食べていたランプベリー。

砂浜をかけまわっていたランプベリー。

仰向けになり、じっと気持ちよさそうにしていたランプベリー。

励ますかのように、そばに寄り添ってくれていたランプベリー。

…

「大丈夫でございましょうか？ よろしければ、代りに、わたくしをランプベリーとお呼びになるのでございませう〜♪」心配してくれたコンパースが、そのように声をかけて励ましてくれたこともあった。でも——、——それでも、ダメだった。

それから何日か経過したある日——

いつもの散歩コースにある橋の端に座り、そこから、山の端に沈もうとする太陽が生み出す“川面のキラキラ”を、ぼんやりと一人で眺めていた。

この光景を、何度、ランベリーと一緒に眺めただろう？

——なんで、死にしまったんだよ？ ランベリー。

...

どれくらいの時間が経ったのだろう。

ある考えに、ようやく、たどり着いたんだ。

——わかったよ。ランベリー。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ゆっくり立ち上がった僕は、家へ向けて、思い出いっぱいの散歩道をしっかり歩き始めた。

54

音楽イン ♪美しき自然 Beautiful Nature


「おーい、わかったよ！ 第3フレームの意味！」

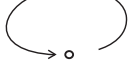
「ほい〜？ ♪ 何でございましょうか〜？ ♪」

「うん。“流れ”を意味しているんだよ！」

「ほいほいー ♪」

「例えば——

太陽がしずむ流れ—— つまりは、地球が1日に1回、
 自転すること。(『朝 → 昼 → 夕 → 夜 → …』)

季節がめぐる流れ—— つまりは、地球が1年に1回、
 太陽の周りを公転すること。(『春 → 夏 → 秋 → 冬 → …』)

雲が雨となり、川として海へ注ぎ、再び、雲となって空に浮かぶ流れ。(『雲 → 雨 → 川 → 海 → 雲 → …』)

葉っぱの中で、水と二酸化炭素と光から、炭水化物と酸素が作られる流れ。(『水 + 二酸化炭素 + 光 → 炭水化物 + 酸素』)

種子から芽が出て葉や茎が育ち、花が咲き、実を結び、再び、種子ができる流れ。(『種子 → 芽 → 葉っぱ & 茎 → 花 → 果実 → 種子 → …』)


食べものが生産され、運ばれ、お店に並び、買われて、食卓に並ぶ流れ。(『食料品の生産 → 物流 → お店 → 購入 → 食卓』)

水や電気、ガス… が、各家庭へ供給される流れ。
 (『供給者(供給装置) … → 水道管、電線、ガス管 (or ガスボンベ) … → 家庭』)

工場で製品が作られ、運ばれ、お店に並び、買われて、家庭で使われる流れ。(『製品の生産 → 物流 → お店 → 購入 → 家庭』)

リサイクル or リユースする流れ。
 (『使わなくなったもの → 回収 → 再利用 → …』)

いえ すなはま すなはま いえ かえ なが
 家から砂浜へでかけ、砂浜からまた家に帰ってくる流れ。
 (『家 → 砂浜 → 家』)

ペダルをこいで、クルクルとタイヤを回す流れ—— 
 つまり、自転車に乗ること。(『キ → コ → キ → コ → キ → コ → …』)

いっ ぽ いっ ぽ なが
 一步一步の流れ—— つまり、歩くこと。
 (『右足 → 左足 → 右足 → 左足 → …』)
 (『テ → ク → テ → ク → テ → ク → …』)

しんぞう なが けつえき たいない じゆんかん
 心臓のドキドキの流れ—— つまり、血液が体内を循環すること。
 (『ド → キ → ド → キ → ド → キ → …』)
 (『心臓 → 動脈 → 脳、肺、胃腸… → 静脈 → 心臓 → …』)

いき す は なが こきゅう
 息を吸ったり吐いたり流れ—— つまり、呼吸すること。
 (『ス → ハー → ス → ハー → …』)

なか す た なが
 お腹が空いたり食べたりの流れ。
 (『お腹が空く → 食べる → お腹が空く → 食べる → …』)

ねむ め ぎ なが
 眠ったり目覚めたりの流れ。
 (『眠る → 目覚める → 眠る → 目覚める → …』)

いのちある存在が生まれ、育ち、年月を重ね—— いかせいのりよく
 をなくし—— 土や空気、海や川といった自然の中へ還る流れ。
 (『いのちが生まれる → 育つ → 年月を重ねる → … → 生命力をなくす
 → 自然の中へ還る。 → …』)

お ちこ から た ち なら げん き なが
 落ち込みから立ち直り、元気になる流れ。
 (『落ち込み → 元気』)

ある じんせい から ある じんせい へ “ライフのあり方” を かわ なが
 ある人生からある人生へ“ライフのあり方”を変える流れ。
 (『ある人生 → ある人生』)

コンパースがアップグレードする なが
 (『カタチ コトバ カラダ アタマ』
 → 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』
 → 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』 + 『→』)

ひと あか ちゃん として たんじょう おや いだ せいちよう はずたつ
 人が赤ちゃんとして誕生し、親に抱かれ—— 成長 & 発達し、
 はな き み むす あか たんじょう おや
 花が咲き、実を結び—— … いつか赤ちゃんを誕生させ、親として
 あか いだ く くり なが
 赤ちゃんを抱き… を繰り返す流れ。
 (『誕生する → 成長 & 発達する → 花が咲く → 実を結ぶ → …
 → 赤ちゃんを誕生させる → 親として赤ちゃんを抱く → …』)

おも えが みらい すじ が なが
 思い描く未来のシナリオ(筋書き)の流れ。
 (『高校に行く → フルーツのような何かを、自分らしくどうやって生み
 出すかを見つける → 努力を積み重ねる → 実現する → …』)

…

どれもこれもが、この第3フレームの枠で説明できるんだよ！」

「ほういほういほういー！ ♪」

「そう言えば、ずっと前に、おじいちゃん、“ライフが変わることは、
 生きている証だ”と話していた。それに、呼吸のスーハスーハー
 や心臓のドキドキなんかも、まさに生きている証だと言えそうだし。
 ——そうだよ！ 第3フレームは、人生はもちろん、生きている

こと、いのち、^{せいめい}生命、^{せいかつ}生活、ライフライン、ライフサイクル、^{せいちょう}成長
 や^{せいじゆく}成熟、アップグレード…も^{せつめい}説明してくれる、ものすごく^{こんぽんでき}根本的
 なフレームなんだよ！ だから、フレーム・フォー“ライフ”なん
 だよ。きっと——。 ^{ぼく}僕は、^{おも}そう思うよ！

「——お^{げんき}元気になられて、よかったですう〜♪ ウルルル… ウル、
 ウル…」

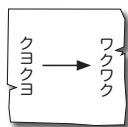
「ありがとう。^{しんぱい}心配かけて、ごめんよ」

「ウル、ウル… ヒィック」

「——。 ^き決めたんだ——。

ランプベリーののおかげで^{たの}楽しかった^{ひび}日々の^{おも}思い出を^で心に^{こころ}しっかりと
 と^{きざ}刻みながら、^{まえ}前を^む向いて^い生きるんだ！

ずっとクヨクヨしながら^{くら}暗く^い生きるのではなく、できるだけ^{わく}ワク
 ワクしながら^{あか}明るく^い生きるんだ！



^{こころ}心の中の^{なか}ランプベリーとともに——」

「ヒィック、ヒィック、ウル、ウル… ヒィック」

「しかも、それは、きっと—— ^{かな}悲しみを^の乗り越えながら、^{あか}明るく
^い生きているおじいさんが、^み身をもって^{おし}教えてくれていることでもあ
 るはずだ——」

「ヒィック、ヒィック、ヒィック…」

55

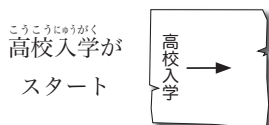
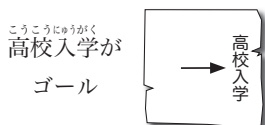
それから、第3フレームを利用した新しいプチ・マップの作り方が、次々と見つかった。

『先 → 後』

『起 → 承 → 転 → 結』

『接続詞 (そして、だから、なので、おかげで、しかし、でも、ところが…)』
= 『 → 』

『スタート → プロセス → ゴール』



『根拠 → 結論』

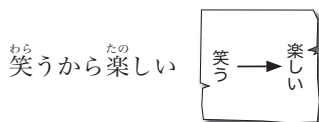
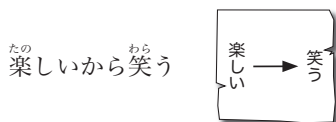
『原因 → 結果』

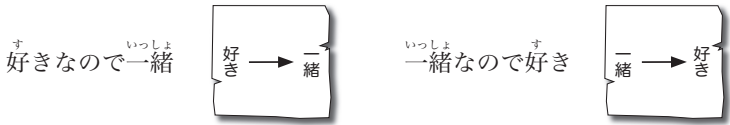
ランブベリーがいたおかげで、楽しかった。

(『ランブベリーがいた → 楽しかった』)

生きている—— だから、昼寝する。

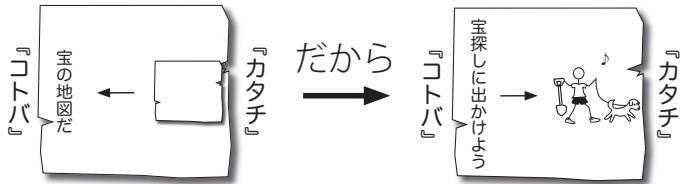
(『生きている → 昼寝する』)



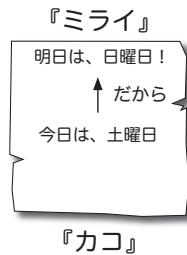
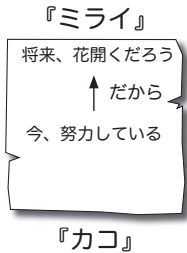


ことば
言葉にして

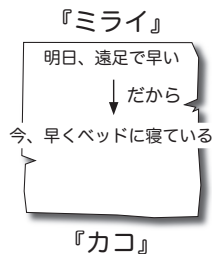
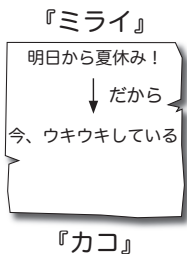
かたち
形にする



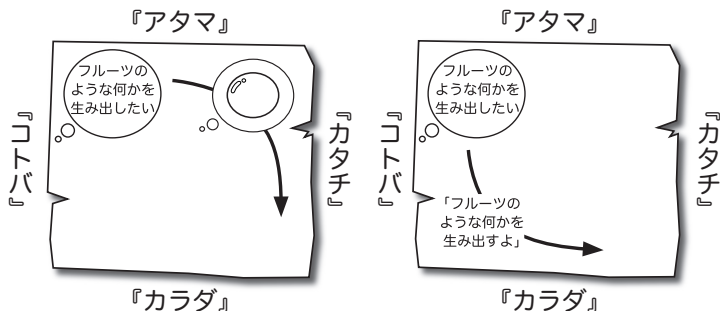
『イマ』 → 『ミライ』がある一方で——



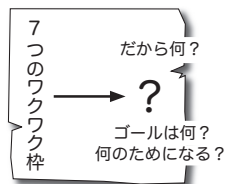
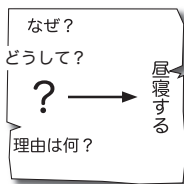
『ミライ』 → 『イマ』もある。



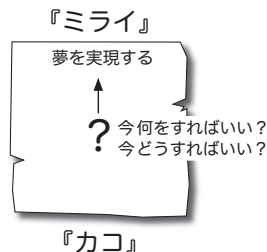
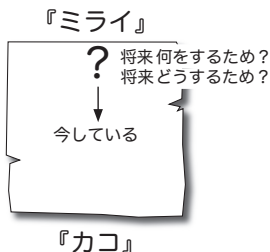
あたま なか かたち 頭の中で形にしてからの不言実行がある一方で、あたま なか かたち 頭の中で形にし
 しないままの ゆうげんじつこう 有言実行もある。



『なぜ?』『どうして?』『理由は何?』がある一方で——
 『だから何?』『ゴールは何?』『何のためになる?』もある。



『将来何をするため?』『将来 どうするため?』がある一方で——
 『今何をすればいい?』『今 どうすればいい?』もある。



56

コンパスとの別れは、予想通り、雪解けの季節に訪れた。

それは、中学卒業を間近に控えた頃でもあった。

音楽イン ♪春 Spring

「オーナー様へのお仕えは、これで引退なのでございますう〜♪

これからは、結婚して幸せな家庭を築くという夢を實現するため、努力して参ろうと思っっているのでございますう〜♪

——そうなのでございますう〜♪ 引退は、ゴールであると同時にスタートなのでございますう〜♪ ギャハハ！」

「うん。応援しているよ」

「ありがとうございますですう〜♪」

「——うん。ところで君は、このあと、どこに行くことになるんだい？」

「——。きっと、どこにも行かないのでございますよお〜♪」

「——え？」

「いつも、近くにいるのでございますう〜♪」

「え？ 近くって——、——どこ？」

——ここにいるのでございますう〜♪

「——。コノヤロ、コノヤロ、コノヤロ！ 映画みたいなことを言いやがって！」

「ギャハハハ！」 「アハハハッ！」

僕は、一緒に笑った。

「——うん。おかげで、これまで楽しかったよ。いろいろ、どうも

ありがとう」

「こちらこそ、おかげ様でしたのでございますう〜♪

ありがとうございましたですう〜♪

——それでは、そろそろお別れのお時間なのでございますう〜♪

お元気でいらっしゃるのでございますう〜♪ さようならなので
ございますう〜♪」

「さようなら。君もお元気で」

あいさつが済んでから間もなく、コンパースの表面の『→』と
コンパースの針の絵が、ジワジワと消えた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

57

中学を卒業した僕は、その春、そのまま地元の高校に進学した。

そうして、高校生として最初に迎えた初夏——

音楽イン ♪夏 Summer

晴れの日に一人で岬へ向かった。

いつもの下り勾配にたどり着くと、いつもの場所にキラリを見つ
けた。

「お、元気そうじゃん！ ——アハッ！ 存在証明とは、よく言った
もんだよ。 ——おーい、おじいちゃーん！ やって来たぞお〜！」

しかし、キラリに近づくとつれ、足の動きが鈍った。

音楽 突然停止 ♪夏 Summer

それは、おじいさんではなく、ビンだったんだ。

そばには、たんねんに磨き上げられたであろう、丸い石——
球状の石が置いてあった。

ビンの中には、紙が折りたたんで入っていた。

——地図？

ぼうぜんとしながらも、中身を取り出して広げてみた。

すると、それは手紙だった。

音楽イン ♪冬 Winter

わかもの
若者へ

わしは、もうダメじゃ。

い ^{あいだ}
生きている間に

おまえさんに

どうしても伝えておきたいことがあるから
て ^{がみ} か
手紙を書かせておくれ。

ライフは、
この ^{うえ} 上ない宝 ^{たから} じゃ。
し ^{ほう}
至宝 ^{しほう} じゃ。

い
生きていること——

それは、とっても、ありがたいことじゃ。

とっても、うれしいことじゃ。

とっても、すごいことじゃ。

どんなに、ささいにおも思えることも
かぞ数えきれないほどのミラクルの上に
な成り立たっておることじゃ。

こきゅう呼吸できること
わら笑えること な泣けること
かつどう活動できること やす休めること
おも思い出せること みらい未来をゆめ夢見られること
はな話せること き聞けること
あい愛せること あい愛してもらえること

...

これらは、ぜんぜん全然あたりまえのことじゃない。

そりゃあ、ときには、
しっばい失敗したり、きず傷ついたり、こうかい後悔したり
せつなかったり、くる苦しかったり…
もあるかもしれん。

じゃがな、これらすべてをひっくるめても、
だんげん断言できる。

ライフは
この^{うえ}上^{たから}ない宝じゃ。

しほう
至宝じゃ。

ライフそのものが
たからもの
宝物なんじゃ。

プレゼントされたいのちを大事にだきしめながら、自分らしく、幸せに生きるんじゃないぞ。
それが何よりの親孝行でもある。

大きくなったおまえさんと再会できて、
とっても、とっても、うれしかったよ。
これまで、毎年来て相手してくれて、
どうもありがとう。

それじゃあ、達者でな。

岬のおじいさんより

お父さん、お母さんにも、よろしく。

この丸い石は、わしの頭だと思って、
なでてやってくれ。

新たなフレーム・マスターの居場所は、
その地図が教えてくれるはずじゃ。

58

そりゃないぜ、おじいちゃん——・・・

^{なみだ}涙があふれて—— あふれて——

おじいちゃんの、あの^{まんぞく}満足^えそうな^{ががや}笑^{あたま}みも、あの^{おおわら}輝^{うえ}いていた^{たから}頭^{うえ}も、
あの^{おおわら}大笑^{うえ}いも … どれもこれもひっくるめて——

おじいちゃんのライフそのものが、この^{うえ}上^{たから}ない^{うえ}宝^{たから}だったんだ。

・・・

^{なみだ}涙^{うみ}で^{すいへいせん}ぼや^{すいへいせん}けている^{うみ}海^{すいへいせん}や^{すいへいせん}水^{すいへいせん}平^{すいへいせん}線^{すいへいせん}——。

ランプベリーもいなくなっちゃったし、コンパースもいなくなっちゃった。そして、おじいちゃんまでいなくなっちゃった。

^{ぜんしん}全身^{ちから}の^{ちから}力^ぬが^{ぼく}抜^{ぼく}けた^{ぼく}僕^{ぼく}は、^{ぼく}ガ^{ぼく}ック^{ぼく}リ^{ぼく}と、^{ぼく}ひ^{ぼく}ぎ^{ぼく}ま^{ぼく}ず^{ぼく}いた。

そのとき——

あっ！

^{ちから}力^ぬの^{ちから}抜^{ちから}けた^{ちから}指^{ちから}先^{ちから}から、^{ちから}地^{ちから}図^{ちから}が^{ちから}ひ^{ちから}ら^{ちから}ひ^{ちから}ら^{ちから}と^{ちから}海^{ちから}面^{ちから}ま^{ちから}で^{ちから}舞^{ちから}い^{ちから}降^{ちから}り^{ちから}た。

^{なみだ}涙^{ちから}で^{ちから}ぼや^{ちから}けている^{ちから}地^{ちから}図^{ちから}は、^{ちから}プ^{ちから}カ^{ちから}プ^{ちから}カ^{ちから}と^{ちから}波^{ちから}に^{ちから}揺^{ちから}ら^{ちから}れ、^{ちから}少^{ちから}し^{ちから}ず^{ちから}つ^{ちから}遠^{ちから}ざ^{ちから}か^{ちから}つ^{ちから}て^{ちから}い^{ちから}る^{ちから}気^{ちから}が^{ちから}した。

音楽 ♪冬 Winter 59 へ続く

59

みんな、いつか、いなくなるということ——

だれもが——

いつか生まれ、いつか死ぬということ——

手元の丸い石と手紙をぼんやり眺めながら、しばらく思いめぐら
せた。 ——とそのとき、ハッとしたんだ。

少なくとも遺された形や言葉は、生き続けるんじゃないか？

そうだ！ この石とこの手紙が、そのことをはっきり教えてくれ
ているんだ！

遺された形や言葉は、石や手紙だけじゃない。おじいちゃんの風
貌やふるまい、笑い声や話し声… を含む、心の中に遺された形や
言葉もある。これらは、心の中で生き続ける。

それに、おじいちゃんが遺した形や言葉が生き続ける一方で——
明るさ、ユーモア、優しさ、愛情… を含む、おじいちゃんの心も、
僕の心の中で生き続ける。

つまり、おじいちゃんとお会ったおかげで育まれた僕自身の心も、
生き続ける。

——そうだ！ 決して、生まれる前の、もとの状態に戻るわけ
じゃないんだ！

何かが遺り、何かが生き続けるんだ。

誰もが何かを遺し、誰もが、何らかの形や言葉で生き続けるん
だ。 きっと—— ずっと——

・・・

60

それから、なぜか——

3匹の子犬たちを産んだランプベリ—

僕らを出産してくれた母

何年も幼虫として地中で暮らし、

ある夏に羽化して成虫として次世代を生むセミたち

多くの種を実らせるヒマワリ…

のことが、次から次へと頭に浮かんだ。

そうだ。

生きものたちは、決して、ただ生まれて死ぬだけじゃない。

生きている間に、精一杯“ライフのリレー”を達成しようとして

いるんじゃないか？

この“ライフのリレー”は、この地球上の生命の誕生のときから
ずっと何十億年も続いているはずだ。

だから、今生きている生きものたちは、本来、全力で“ライフの
リレー”を達成しようとしている真っ最中のはずだ。

確かに、おじいちゃんのように、実の子孫を誕生させるといふ形
では“ライフのリレー”を達成できない場合もあるだろう。

しかし、その場合も、別の形で、別の意味で“ライフのリレー”
を達成できるんじゃないか？ それこそ、おじいちゃんが、はっきり
証明してくれているように——。

それに、どんな場合であっても、何らかの形や言葉で、ほかの誰
かの“ライフのリレー”を助けることは可能だろう。

...

将来、自分の赤ちゃんを授かるうが授からまいが、どちらにしても関係ない。僕も、この“ライフのリレー”を何らかの形や言葉で全力で果たしたい。応援したい。それは、おじいちゃんを生かすことにもなるはずだ。・・・

おじいちゃん—— オレ——

フレーム・マスターになりたい。

——なるよ。

そして、おじいちゃんが遺してくれた形や言葉、心… つまり、おじいちゃんの“ライフ”を生かし続けるんだ。

音楽 ♪冬 Winter 61へ続く

61

重大なことに気づいたのは、そのあとだった。

あの地図がなければ、新しいフレーム・マスターに出会えない。出会えなければ、残りのフレームが何なのかわからない。

わからなければ、フレーム・マスターになれない。

!!!

急いで海をのぞき込んだ。

どこだ!? …… ——あっ、あった! まだ見える!

いくらか離れた海面上に、地図が浮かんでいた。

海に入って取り戻す?

——いや、でも、ちとコワくないか?

もし、おぼれたりしたら——

——いや、でも、学校がっこうのプールで50メートルは余裕よゆうで泳およげるし、
おぼれたりはしないだろう。

うん、大丈夫だいじょうぶさ。今いましかタイミングがなさそうだし——

いや、でも——

...

迷まよったあげく——、——決きめた。

——サブン！

僕ぼくは、海うみの中なかに飛とび込こんだ。

音楽 ♪冬 Winter 62 へ続く

62

けれど——

そのときの海うみは、甘あまくなかった。

泳およいでも泳およいでも地図ちずに近ちかづけないばかりか——

「あぐっ」海面かいめんの上うえに顔かおを出だしているのがやっとなで——

「うげっ、うごっ」——まずい！ おぼれちまう！？

思おもいとは裏腹うらはらに、地図ちずとの距離きょりがますます広ひろがる一方いつぽうで——

「おぐっ、おごっ」——引ひき返かえす？ でも、地図ちずが必ひつよう要ようだ。

「おごげっ」——沈しずんだ！？

とうとう地図ちずを見失みうしなった。

音楽 ♪冬 Winter 63 へ続く

63

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

岸へ戻る事が難しくなっていることに気づいた。

もがけど、もがけど岸に近づけないばかりか、まともに浮いてい
ることさえもできなくなっていて――

それでも――懸命に、もがいた。

「ごぼっ」

・・・ ―う、うそだろ？

「うごっ」

・・・ ―こ、こんなことがあっていいのか？

「おごっ」

・・・ やってみたいことが、いっぱいあったのに――

「がぼっ」

・・・ あれとか―― これとか――

少しずつ体がついてこなくなっていた。

「あがっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ伝えなきゃ――

「ごぼぼっ」

・・・ あれとか―― それとか――

「おごごっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ―― ごめんよ――

体が、とうとう、ほとんどついてこなくなった。

「——」

・・・ ああ—— ああ—— ……

音楽フェードアウト ♪冬 Winter

「おまえ～！ 何やっとうるう～！？」

そのとき、かすかに声が聞こえた。

まぼろし？

ギリギリのところで懸命に周りを見ると—— 信じられないことに、船に乗っているおじいさんが、そこにいた。

——え！？

「何やっとうる！？ おまえ！」 この耳で、はっきり聴けた。

おじいさんは、必死の形相で、手から腕にかけてを握りしめると、渾身の力で、僕を船上に引き上げてくれた。

岸辺へ向かう船上で、僕らは、お互いに無言だった。

それでも、おじいさんは、自分の家まで僕を連れてゆき、シャワーと着替えを提供してくれた。

64

僕らは、水平線の見える、いつもの地点にたどり着いた。

そこでついに—— おじいさんは、立った姿勢のまま、怒りを爆発させた。

「ばかものお！！ ——わしが来ておらんかったら、本当に、死んでおったぞ！！」

こんなに怒るおじいさんを初めて見た。

「だって——」・・・「——おじいちゃん、死んだんじゃ…」

「ふざけるな！！——何、寝ばけたこと、言っておるんじゃ！？ わしが死ぬと、おまえさんも、一緒に死ぬのか！？ そのことが、おまえさんがとった行動のよりどころだったのか！？ これが、わしの死から、おまえさんが導き出すことなのか！？」おじいさんの声は、震えていた。

「——」確かに、おじいちゃんが死んだことを理由にするのは、間違えている——。

僕は、口を真一文字に結んだ。

おじいさんは、しばらく経ってから、静かに口を開いた。

「——むかし、巨大地震が起きて、とてつもなくでっかな津波が押し寄せてきた地域がある。

そのとき、多くの尊い命が、犠牲になってしまった。

音楽イン♪ Wishes In Sorrow

倒壊物に押しつぶされてしまった者、土砂に流されてしまった者もおった。波に飲まれてしまった者、沖に流されてしまった者もおった。

突然、人生を奪われて、夢を砕かれて—— どんなにか、つらかったことか——。どんなに無念で、どんなに悔しかったことか——。どんなに家族を心配し、どんなに残す者たちの身を案じたか——。どんなにか、二度とこのようなことが起きないように願ってくれたか—— …」

「——」

ふと見ると、おじいさんは顔をしわくちやにしている—— 涙だ
か、汗だか、海水だか、とにかく顔がメチャクチャ濡れていた。

「彼ら彼女らが身をもって教えてくれた、かけがえのない知恵を
大切に守り続けなければならない。

彼ら彼女らを心の中に生かし続けて、その生きていた証を、その
愛を語り継がねばならない。

彼ら彼女らの分も、生きねばならん」

「——」 確かに、そのとおりだよ。 そう思いながら—— ありつ
たけの涙がこぼれ落ちてるように感じた。

「——おまえさんの人生、本当に、これからなんじゃぞ。わしより
ずっと若い分、これから、楽しいことやうれしいことに、わしより、
はるかにいっぱい出会えるはずじゃ。

それに—— いやなことだけでなく、いいこともある。それが人
生じゃ。それは、自然が、脅威になるだけでなく、恵みにもなって
くれることと同じじゃ。

じゃから、たとえ、今、どんなにつらいこと、いやなことがあつ
たとしても—— 決して早まるんじゃないぞ。ふんばって生きてお
れば、きっと、いいこともあるはずじゃ。そのつらさが大きければ
大きいほど、のちに得られる喜びも大きく膨らむじやろう。

——そういう意味でも、おまえさんの人生、これからなんじゃ」

親身になって僕のためを思って、そう言ってくれているのだと痛
いくらいわかった。とてもありがたかった。

——誤解の有無は、全く関係なかった。

65

僕たちは、その水平線すいへいせんの見える地点みえるちてんに並んで腰ならこしを下ろした。

「無事ぶじで何なによりじゃった。うん、よかった。うん、よかった」しみじみと言うおじいさん。

「——。——おじいちゃん？」意いを決けつして問といかける僕ぼく。

「——ん？」

「——。手紙てがみ——」

「——ああ。——すまんかったのお」

「いったい、何なにがあったの？」

「——骨ほねじゃ」

音楽イン ♪冬 Winter

「骨ほね？」

「ああ、魚さかなの骨ほねじゃ」

「——」

「あのやろう—— どでかくて、硬かたくて、するどくて—— そいつが、のどに引ひっ掛かかちまって—— 痛いたくて、痛いたくて—— 血ちも出るし、鼻水はなみずも出るし、涙なみだも出るし、息いきもまともにできんし—— 苦くるしいのなんのって、そりゃあ、もう、絶対死ぜったいしぬと確信かくしんしたんじゃ」

「——」

「それで—— それでも—— 生いきている間に、おまえさんに、どうしても伝つたえなきやならんことがあると思おもって—— 痛いたみこらえながら—— 涙流なみだながしながら、その手紙てがみを書かいたんじゃ」

「——」

「その書いた手紙てがみをビンに入れて、石いしと一緒にいっしょいつもの昼寝ひるねの場所ばしょ

に置くと—— その場で力尽きて、いよいよ最期だと覚悟しながら、そのまま横になって目を閉じた」

「——」

音楽 一時中断 ♪冬 Winter

「そしたら—— そしたらよ、——夢を見たんじゃ」

「夢？」

「不思議な夢じゃった——」

その夢は、次のような内容だったらしい。

いつもの場所で横になっていると、“起きて、起きて”という感じで、頭に刺激が加わった。

それがランプベリーのペロペロであることに気づいたおじいさん。
“こらすぐたい。やめろ。ランプベリー。こら”と話しかけようとするけれど、声が出ない。目も開かない。起き上がれない。…

すると、遠くから声が聞こえてきた。「おーい！ 元気に生き～ているかあ～い？♪」それは、僕の声だった。

“おーう！ 元気に生き～るともお～！♪”と返事をしようとしたけれど、なぜか、声が出ない。目が開かない。起き上がれない。

…

「オイオーイ♪ 奮発してメロンを持ってきたぞ～♪」と僕の声。

“メロン… メロン…” 「——メロン！！！」 おじいさんは、そのとき、やっと夢の中で声を出せた—— と同時に夢の中で目を開けられた。

「——ようやく実際に目を覚ましたのは、メロンを受け取ろうとする、まさにその瞬間じゃった」

「——」 ——オレたちより、メロン!?

「そしたら—— その夢をきっかけにして、次から次へと楽しかった思い出たちが心に浮かんできよった。

それに、将来の楽しみも、次から次へと浮かんできよった」

「——」

「そしたら—— なんだか妙に元気が湧いてきてよ、もうちっと頑張ってみようかなって気になっちまって——。

——あとは気力よ」

音楽 途中から再開 ♪冬 Winter

「気力?」

「そうじゃとも。もうろうとしながら、歩いて歩いて—— 気力で船を操作して、となり町の港まで行って—— それから、フラフラしながらも気力で歩いて歩いて—— そうしてやっと、港の近くにある病院にたどり着いたんじゃ」

「——」

「もし、お前さんたちがおらんかったら—— もし、お前さんたちが毎年ここに訪ねてくれておらんかったら—— わしやあ、とつくに、完全にあきらめて—— 本当に死んでおった」

「——」

「お前さんたちは——、 ——わしの命の恩人じゃ」

「——っていうか、おじいちゃんこそ、僕の命の恩人じゃん」

「お互いに無事で何よりじゃった! うん。うん」 おじいさんは、泣いているのか笑っているのか、よくわからない表情をしていた。

「おじいちゃん——」 おじいさんの肩に頭をくっつけるようにしてかがみ、目を閉じた。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

66

「ライフは、この上ない宝——」 僕は、そうつぶやいた。

「そうじゃとも」

「——あ、そうだ！ わかった！」 そう言いながら僕は顔を上げた。

「ん？ 何がわかったのじゃ？」

「地図は、やっぱり宝の地図だったんだよ！ ——おじいちゃんの居場所を教えてくれていたから。アハッ！」

「——ありがとうよ。こんな、おいぼれジジイを宝じゃと言ってく
れて。」

じゃがのお、おまえさんは、わしなんかと比較にならないほどの、
はるかに、はるかに、すてきな、この上ない宝をすでに持っている
んじゃよ」

「——」

「むろん、ほかならぬ、おまえさん自身のライフじゃ」

「——」

「わしにとっても、この上ない宝じゃ。そして、おまえさんのご両
親にとっても、この上ない宝じゃ」

音楽イン ♪ Birthtime

「——」 なぜか、このとき、生まれて間もない僕をほっとしながら
ら抱いている母と、それを写真に撮っている父の姿が心に浮かんだ。

「おまえさんが、かつて誕生して、今こうして生きていることは、
決してあたりまえじゃない。それは、さまざまな幸運や、親を含む、
さまざまな方々の多くの努力や力添えのおかげのことなんじゃよ」

「——」

「何と言っても、小さな子どもだった、お父さんとお母さんが成長して、思春期を乗り越え—— そうして、何らかの形で、めぐり会わなければ、おまえさんは存在していなかったのじゃからのお」

「——」 . . .

「それに、最初は、誰もがたった1つの細胞じゃった。そのたった1つから始まって、ここまで育ったのじゃから、それはもう大した幸運で、とつてもありがたくて“あたりまえ”から程遠いことじゃ」

「——」

「それに、生まれてから何年もの間、誰もがみな、自分だけでは、ほとんど何にもできなかった。

例えば、生まれて間もない赤ちゃんの頃だったら、おっぱいやミルクを飲んだりも、おむつを換えたりも、お風呂に入ったりも…どれもこれも誰かの助けを借りて初めて達成できたことじゃろう」

「——」

「そう言えば—— おまえさんのお父さんやお母さんが、赤ちゃんの頃のおまえさんと幼いお兄さんを連れて、わしのところにやってきてくれたときのことが、昨日のこのように目に浮かぶのお」

「——」 ——え！？ 手紙の中の“再会”って、そういう意味？

「——お父さんやお母さんは、子どものいない、わしら夫婦のことを思いやって遊びにきてくれたんじゃろうな。赤ちゃんだった、おまえさんやお兄さんを、わしと妻に抱っこさせてくれたよ。

——とつても、うれしかった。とつても」

全然、知らなかった。「——父や母や兄とお知り合いなのでしょうか？」 思わずかしこまって、そう尋ねた。

「お兄さんとは、赤ちゃんだったおまえさんと一緒のときに会ったつきりじゃった。小さかったから、おそらく、わしのことを覚えておらんじやろう。

じゃが、お父さんとお母さんとは、よく知り合っておる。お前さんらが生まれるずっと前からのお」

「——」 . . .

「まあ—— おまえさんらは、わたしの孫みたいなもんじやな。いや、ひ孫かな？ アッハッハッ！」

「——」

音楽 ♪ Birthtime 67へ続く

67

「今、ここまで大きくなったおまえさんが、まず何よりすべきことは—— 自分自身のライフを、精一杯、大切にすることじや」

「——」

「——もちろん、いつまでも自分のライフだけを大切に続けなさいと言っておるわけではないぞ。なぜなら、自分だけを大切にしていって、周囲を大切にしておらなければ、心身の健康を失ってしまった周囲に影響を受けて、結局は、自分自身を大切にできなくなってしまうからじや。

自分を愛することは、自分と周囲の両方を愛しておってこそ、本物になる——」

「——」

「むろん、周りだけを大切に^{たいせつ}し続け^{つづ}なさい^いと言っておるわけでもな
いぞ。なぜなら、逆に^{ぎやく}周囲^{しゅうい}だけを大切に^{たいせつ}して自分自身^{じぶんじしん}を大切に^{たいせつ}して
おらなければ、いずれ^{じしん}自身^{しんしん}の心身^{けんこう}の健康^{そこ}を損^そなってしまう^{けつぎよく}、結局^{けつぎよく}は
周囲^{しゅうい}を大切に^{たいせつ}にできなくなるからじゃ。

じゃから、周囲^{しゅうい}を愛^{あい}することも、自分^{じぶん}と周囲^{しゅうい}の両方^{りょうほう}を愛^{あい}しておっ
てこそ、本物^{ほんもの}になる——。

つまり、自分^{じぶん}のライフ^{まわ}も周り^{まわ}のライフ^{りょうほう}も両方^{りょうほう}を大切に^{たいせつ}することが
だいじ^{だいじ}大事^{だいじ}になるんじゃ」

「——」

「確かに^{たし}、ときには自分自身^{じぶんじしん}以上^{いじょう}に大切に^{たいせつ}誰か^{だれ}を守る^{まも}ために、自分^{じぶん}
を犠牲^{ぎせい}にしなければならぬこともあるかもしれん。

しかし、そもそも、その“自分自身^{じぶんじしん}以上^{いじょう}に大切に^{たいせつ}誰か^{だれ}”に本当^{ほんとう}の
意味^{いみ}でめぐりあ^あうために、自分^{じぶん}と相手^{あいて}の両方^{りょうほう}を大切に^{たいせつ}し続け^{つづ}ておる
ことが不可欠^{ふかけつ}じゃろう」

「——」

「おまえさんも、自身^{じしん}と周囲^{しゅうい}の両方^{りょうほう}を大切に^{たいせつ}しながら本当^{ほんとう}の意味^{いみ}で
自分自身^{じぶんじしん}をこの上^{うえ}ない宝^{たから}のように大切に^{たいせつ}しておれば、将来^{しょうらい}、おまえ
さん以上^{いじょう}に、この上^{うえ}ない宝^{たから}と、きつとめぐりあ^あえるはずじゃ。

——そう信^{しん}じて生きておってよいんじゃ」

「——」

「——。むろん、その至宝^{しほう}は、このわしのことではない」

「——」

「じゃから、おまえさんの人生^{じんせい}、本当^{ほんとう}に、これからなんじゃ」

「——」

68

「——うむ。やはり見込み通りじゃ。背もすっかり追い抜かれてしもうたし、声変わりも始まっている。

——思春期ってやつじゃな？」

「——」

「いいのお、若いもんは——。これから、手紙通り若者と呼ぼうぞ。アッハッハッ！」

「——。 ——おじいちゃん？」

「——ん？」

「おじいちゃんの人生、これからも長いんだかね。これからも、まだまだ楽しいことやうれしいことが待っているかね」

「——」

「本当に—— ゼッタイ——」

「——。 ——ああ。 ——そうじゃな。 ——ありがとう」

涙流しながら手紙を書いてくれたおじいさんのライフも、やはり、かけがえのない、この上ない宝、至宝であると思った。

69

それから、ランプベリーのことも含めて、この1年で考えたこと、感じたこと、やったことを、おじいさんに話して聞かせた。

「そうか—— ランプベリーのことは、つらかったのお」

「ああ——」・・・「——あ、でも、今は、もう大丈夫さ」

「——うむ」

「——」・・・

音楽フェード・イン ♪冬 Winter

「おもわずかな悲しげな表情をってしまった僕に気づいたからか——」

おじいさんは、静かに語り始めた。「まあ、動物にしる人間にしる、いずれ、いつかは、この地球から引退してしまう。

しかし、そのことにさえも重要な意味がありうるんじやよ」

「——」

「少し冷静に想像してみてください。地球上にライフデビューしたあらゆる生きものたちが一切引退しない場合にどうなるかを——」

「——」・・・

「まあ、科学技術が十分に育ち、ほかの天体へも含め、宇宙に進出する可能性もあるだろうから、話は複雑じゃが——」

「——」・・・

「いずれにせよ、地球から引退することには、少なくとも、それによって未来の世代のためにスペースや資源を譲ってあげられるという大事な意味がありうるんじやよ。

そうやって、ライフあふれる地球をリレーし続けるんじや。

過去の世代から今の世代へと、今の世代から未来の世代へと、

つぎつぎ
次々と——」

「——」・・・

「それは、わたしのようになつしそんのこをせなかつた存在にとっても同じじゃろう」

「——」

「それでも、そりゃあ、さびしいさ。さびしい。このライフあふれる地球ちきゅうからいなくなっちゃうのは——」

「——」

「じゃがのお、そのことで—— ただ悲嘆ひたんにくれたり、ただおびえたり、ただ投げやりなになったり… するだけでは、つまらん結果けっかを招まねいてしまうだけじゃろう」

「——」

「今いま生いききている存在そんざい、自身じしんを含ふくむあらゆる生物せいぶつたちはみんな、いずれ地球ちきゅうから引退いんたいしてしまう。まずは、そのことを十分じゅうぶんに受け入れ

る。
じゃが、決して、そこにとどまるのではないぞ。

“だから、どう生きたらいいのか。だから、どう生いききたいのか。…”
——つまり、“だから、どう生いきるのか”こそをしっかりと見みつめるんじゃ」

「——。 だから、どう生いきるのか——」

→ どう生いきるのか——

音楽 ♪冬 Winter → ♪春 Spring

「そうじゃとも。

だから、どう感かんじ、どう考かんがえ、どう行こう動どうしながら生いきるのか。

だから、人じん生せいで、何なにを選せんたくしながら生いきるのか。

だから、誰だれに何なにを伝つたえながら生いきるのか。

だから、誰だれに何なにを与あたえながら生いきるのか。

だから、誰だれに何なにをここを残のこしながら生いきるのか。

だから、どのような人じん生せいのあり方かたを現じつ現げんしながら生いきるのか。

… も含ふくめてじゃ」

“だから、どう^い生きるのか”
こそを^みしっかり見つめる

「——」

「それは、結局、過去に新たに生まれた何か、今、新たに生まれて
いる何か、将来、新たに生まれるだろう何かを見つめながら生きる
ことにもつながるじゃろう」

「——」 ——そうだ！ 過去に、太陽も、地球も、動植物も、
人間も、自分も… 新たに生まれた。

だから、未来に、新たに何かが生まれてもおかしくないんだ！

将来、新たに何が生まれるのだろう？

将来、新たに何を生み出せるのだろう？ ……

やっぱり—— 『カコ イマ ミライ』も、ワクワク^{わく}だった？
『カコ イマ ミライ』も、フレー！ フレー！ フレームだった？
……

「それらを見つめながら生きておれば——

将来の目標を健全に想い描けるようになるかもしれないし、ある
いは、今生きていることの喜びを全身で感じ、瞬間瞬間を愛おしく
おもいながら過ごせるようになるかもしれないし、あるいは、人生の
実り、フルーツのような何かを、より良質で十分満足なレベルにま
で高められるかもしれん」

——おじいさんは、ほほ笑みながら僕を見た。

「——ああ。そうだね。 ——ありがとう」

それから、おじいさんと僕は、腰を下ろした状態で、しばらく
水平線を眺め続けた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

70

「——よし、それでは、そろそろ教えよう」とおじいさん。

「え？ 何を？」と僕。

「次のフレームをじゃ——」

「ああ、そうだったね」そのまま僕は固まってしまった。

「——ん？ では、地図をよこしておくれ」

「——って、やっぱり必要だよな」

「どうしたんじゃ？」

「——。誤って海の中に——」

「あ！？」おじいさんは、急いで立ち上がり、海面をのぞき込んだ。

地図が、どこにも見あたらないことを悟ったおじいさんは、しばらくの間、呆然と立ちつくしていた。

「——。——。おまえさん—— そいつを取り戻そうとして、海に飛び込んだってわけか——」

「——」僕は、小さくうなずいた。

「そうだったのか——」

——うむ、うむ。そうか、そうか。

わしゃあ、少し力が湧いてきたぞ」

「——」

「——さっき怒鳴って、損したぞ。アッハッハッ！」

おじいさんは、やはり誤解していたようで——

71

音楽イン ♪夏 Summer

「そうとわかれば——」^{あか}明るく、^いそう言うのと、おじいさんは、ゆっ
くりしゃがみ、そのまま^{よこ}横になった。

「——ん？」と僕。

「ひとまず^{ひるね}昼寝じゃ」

「え？ ——^{ちず}地図は^{だいじょうぶ}大丈夫？」

「——。 ^{わかもの}若者よ——」

「ん？」

「フレーム・マスターをなめちゃあいかん」

「いや、別に、^{べつ}なめちゃいけないけど——」^{あわてて}あわてて^{ひてい}否定しながらも、
ランプベリーがおじいさんの^{あたま}頭をペロペロなめているシーンが、^{こころ}心
に^う浮かんだ。

「まあ、なんとかなるじゃろう。

それより、おまえさんも、たまには^{ひるね}昼寝してみたらどうじゃ？

——^{ひるね}昼寝にも、それなりに^い意味がある。^{すこ}少しは^{みなら}見習え」

「——。 ——^{ひるね}こっちは^{えんりよ}昼寝しなくていいよ。^{えんりよ}遠慮しとくよ」

それから^{ねむ}眠るなんて、そのとき、^{かんが}とうてい考えられなかった。

「そうか——。 じゃ、お先に」^め目を閉じるおじいさん。

「——」 . . .

でも——

^{ぼく}僕も、とりあえず^{よこ}横になってみることにした。

でっかな^{あおぞら}青空が^{ひろ}広がっている——

^{しろ}白い雲が、ゆるやかに^{なが}流れている——

さわやかな潮風が、全身をなでている——

ここで横になると、こんな感じになるんだ——。

けっこう気持ちいいかも——。

おじいさんは、幸せそうな表情をしながら眠っていた。

あれを、なくしちゃって—— 本当に大丈夫だろうか？

それなのに昼寝だとは—— ……

ったく—— ……

ああ、なんだか——

まぶたが—— だんだん重たくなってきたぜ——

ああ—— あれえ—— ……

体は、そうとう眠たがっていたらしい。

僕は—— 不覚にも、そのままぐっすりと眠り込んだ。

音楽♪ 夏 Summer

サビのあたりから

そのままエンドロールに続く

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For Life

となりのコンパス③

第3フレーム

『→』

【完】